

新世代パネルⅡ「傷としての身体の変容と表象」

橘川智哉（総研大大学院）：「戦中―戦後に見る海野十三の人体改変モチーフ」

報告要旨

逓信省電気試験所勤務時代に作家としてデビューした海野十三は、1930-40年代にかけて様々な科学小説を発表した。戦争SF作家を代表する人物として知られる海野は、未来の化学兵器や未来の戦争といった題材を得意とし、戦中期に多くの軍事科学小説を発表した。その一方で、臓器移植などの医学上の架空の技術を扱った作品も初期から発表し続けている。

人体改造を可能とする世界のなかで生じる身体機能の合理化や身体の商品化といった問題が海野の描く「科学小説」のテーマの一つにあったことは間違いない。こうした人体改変のモチーフは、支配と被支配の相補的な同意関係に基づく生命維持の規定が行われ、人間の生がその中で管理されていくというようなバイオポリティクスの議論と響き合う問題であるように思われる。戦中戦後の日本において、臓器、脳、腕などの身体部位は、移植手術による治療への期待が目論まれながらも、現状的にはいまだ交換不可能な領域であった。しかし、科学技術の向上による身体解剖は、個人を資本主義や国家的な権力装置に組み込むという側面も担って社会の認識のなかに浸透しつつあった。

終戦の日に海野は一家心中を図った。海野の心中は未遂に終わったものの「海野十三は死んだ。断じて筆をとるまい。」と日記に書き込み、以降二年間は「丘丘十郎」名義で作家活動を行っている。こうした海野のなかにある明確な戦中戦後の線引き意識が、一貫して描き続けていた人体改変のモチーフとどのような影響関係にあるのか。本報告では海野のテキストをいくつか確認しながら、人間の身体が改変されていく表象を軍事的な国家体制から逸脱していく生政治が生起する場として分析を行い海野の戦後を捉え直すことで、彼の科学小説の意義を考察したい。